

タイのコイン —お金か、国家のアイコンか?—

青木 まき

●コインはご尊影?

バンコクでタクシーに乗ってぎよつとした。目に入ったのは、ダツシユボードを整然と埋め尽くすコイン、コイン、コイン……。まるでタイルのように、コインがびっしりと貼りつけられていたのである。この人はコイン収集家で、これは自慢のコレクションなのだろうか。それとも車内で小銭を無くさないための画期的保管法なのか。理由を尋ねると、運転手は一言「王様のご尊影だからね」。

言われてみれば、ダツシユボードを埋め尽くす一〇パーツ、五パーツといったコインは、全て現国王・ラーマ九世の姿が刻まれた表面が見えるように貼られている。タイでは店舗や公共施設、個人の家など至る所に国王や王族の肖像画が飾られ、訪れた外国人に国民の王室に対する敬意を強く印

象づけるが、このタクシー運転手は、その狭い仕事場にうつつけることで、王室への敬慕を示していたのだ。しかも驚いたことに、彼はこれらのコインを接着剤でしかに貼り付けてしまっていた。彼はもはや、コインを貨幣ではなく完全に装飾品として扱っているのだった。

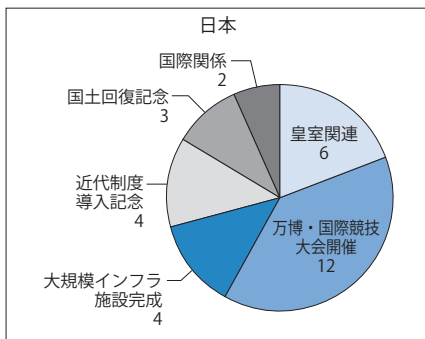
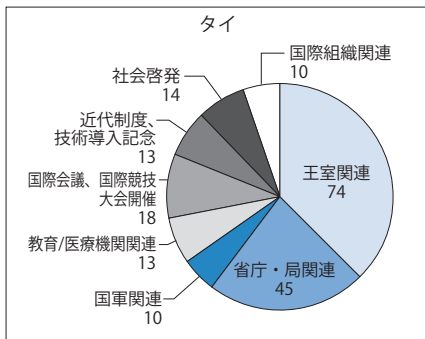
●国家のアイコンとしてのコイン

タイ財務省編纂『タイのコイン、その発展』によると、現在発行されているタイのコインは、いづれも表面に国王の肖像が、裏面には仏教に関連した意匠と国名が刻まれており、これによって「国王、宗教、国民」から成るタイ国家を体現しているのだという。こうした国家を表すアイコンとして

のコインの性格を最も顕著に観察できるのが、記念コインである。タイは記念コインの種類が多く、コレクターズ・アイテムとして取引される他、多くが通常貨幣として流通している。

図は記念コイン発行理由の内訳を日本とタイで比較したものである。一見してわかるのは、タイにおける王室関連コインの多さであろう。財務省によると、記念コ

図 記念コインは、どんな出来事を記念しているのか?



(出所) タイ財務省および日本国造幣局ウェブサイトより、筆者作成。

ンは現国王の治世(一九四六年(現在)に限っても一九六回、五〇種類以上が発行されており、うち王室関連のものは約四割近くを占める。その記念内容を列挙すると、国王在位記念、王族の誕生日、王子・王女の学位取得、国際機関による国王や王族の表彰記念など、さながら王室の家族アルバムを見るようである。ちなみに日本の場合、戦後三〇回発行された記念コインのうち最も多いのは万博やオリンピックといった国際的イベントの開催を記念するもの(二二回)であり、皇室関連の硬貨発行は六回に留まっている。

また、王室に次いで多いのが官庁や局に関連した記念コインだということも、タイという国家のあり方を反映している。日本でも、



1バーツ（右）とペンで額面を手書きされた2バーツ（左）。このコインは表面に書かれているが、一応国王の顔を避けているようにもみえる（写真提供：初鹿野直美氏）

内閣制度や地方自治体法施行と

いった近代的統治制度の成立を記念するコインはあるが、タイの場合には制度ではなく、特定の省庁や省内の局の成立を記念しているのである。タイの官僚制度は立法府や社会勢力に対する自律性が強く、一九八〇年代まではタイの政治体制そのものといえるほど大きな権力を有していた。その中核をなすのが局である。局は省庁内の一組織でありながら法人格を有し、現在でも政策決定・運営において強い権限を持っている。こうした特定の省庁や局を記念するコインが、王室に次いで記念コイン全体の約二割を占めているのである。三番目に多いのが教育・医療機関（一三回）だが、これも省庁と同様に公的部門に属する特定の

機関に関するものである。これに国軍（一〇回）が続く。そしてこれらのコインのほぼ全てに、国王と王室の肖像が刻まれている。王室、官僚制、国軍という

記念コインのラインナップは、先に述べた財務省の説明とは少し

違った意味で、タイという国家のあり方を如実に映し出している。タイの記念コインは、一九六一年の国王夫妻外遊帰国記念コインを端緒として頻繁に発行されるようになった。当時は、首相に就任したサリット・タナラット陸軍元帥により「タイ式民主主義」の導入が進められた時代である。サリットはその統治理念に王制を組み込み、王室の権威を高めることで国民統合を進めようとした。タイのコインは、そうした政治体制構築の為のメディアとして発行されてきたのである。

●日常のなかのコイン —生活と建前の間で—

このようにタイ国家のあり方を国民に知らしめるべく発行されたコインだが、一般の人々はこれをどう扱っているのだろうか。そのひとつの例が、冒頭で紹介したタクシーだった。しかし実際には、一般人が皆このようにコインをこ

る。例えば二バーツ。二〇〇五年に発行された二バーツは、その形状

が一バーツとよく似ており、タイ人でもしばしば見間違え。それを避けるため、コインにペンで「二」と書いてあるものを良く見かけた。一〇枚の一バーツ玉をセロハンテープで纏めたものを一〇バーツの代わりに渡されたこともあった。お手製の「棒金」というわけだ。またある時など、市場で買い物をしたら売り子のおばさんがブラジャーの脇からお釣りを取り出してきたこともあった。たじろぐ筆者を尻目に、おばさんは泰然として受け取った代金をまた恰幅の良い胸元の「財布」に納めていた。この例などコイン云々以前にマナーとしていかなるものかと思うが、極めて実用的ではある。

試みにタイの友人たちにコインの扱い方に気を遣うかと尋ねたところ、遣うという人もいれば遣わないという人も居た。ただ遣わないと答えた人も、ことさらに奉ることは無いが、タイ人が不浄とする足でコインを踏むなどの行為には嫌悪感を覚えるということだった。先に述べた手書きの二バーツも、さすがに王様のご尊顔の上に

ペン書きするのは憚られるのか、筆者の見たものの多くは書き込みが裏面にあった。書き込み自体が不敬な行為だと明言する人もいた。とはいえ、市中に回る手書き二バーツを当局が不敬罪で取り締まるなどという話は聞かれな

い。察するに、規範上コインは丁重に扱うことが望ましいが、実際には積極的に特別扱いすることは無いということのようだ。財務省の意気込みに比べ気抜けるほど無造作に扱われているコインだが、その背景には、近年の物価高でコイン自体が通貨としての価値を失いつつあるという事情も窺われる。今時、コインは公共料金や、スーパーでの消費税の支払い、高架鉄道や地下鉄の自動券売機や子どものお小遣いくらいでしか使わないという意見も聞かれた。国家のアイコンの威光も、諸式高にはかなわないのか。それとも通貨としての実用的な価値を失った後に残るのが、国家のアイコンとしてのコインの役割なのだろうか。

（あおき まき／アジア経済研究所
東南アジアグループ）